史料室だより No. 65 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2005年11月15日

大正の頃の東洋英和

－坂文子さん（1923年高等女学科卒）のお話－

あのころは高等女学校といいましたわね、福井県立の２年生の夏休みから引越してまいりましてね、六本木の近くに住んでおりました。みなさん今お聞きになるとおかしいんですけれど、女の子だから遠くへは通わせられないといいまして、第三〔府立第三高等女学校〕に入れるんだっていって。そうしたら、夏休みに来ましたから２学期からでしょ、９月の補欠がなければ入れませんて。補欠が全然ないんです。だめだって言われまして。じゃあしょうがない、英和はすぐそばにあるから、ま、そこへって。あたくしは父が早くに亡くなりましたから、ずっと叔父に育てられましてね…その叔父が頭が頑固でして、「あっ、耶蘇の学校だけどしょうがない、入れとこ」なんて。それで２学期から東洋英和へ入りました。

龍土町ってのが六本木にございましたでしょ。そこに叔父がおりまして、そこから通いましたからむろん歩きましたよ。龍土町のところが四つ角になってましてね…。三聯隊がありました。近くに木村さんて方がいらして、その方と仲良しになりまして、よく二人で落ち合って一緒に通っておりました。関東の大震災がありました時には里親がそこにおりまして、倒れはしませんでしたけど、レンガ塀がへびのようにくねくねとなってしまいまして、誰か下敷きになる人があったら大変だったのに崩れなかったって、あとで話しておりました。私はもうその頃に舞鶴におりまして、主人が海軍だったもので。それで夏休みだからっていって、主人の父母の元に帰ってたんですけれど、ちょうど一週間前に、もう休暇が明けるから帰らなきゃと舞鶴へ帰りましたらあの地震で。だから地震には遭いませんでしたけど…もう大変な騒ぎでございました。昔の話ですわ。卒業が大正12年だから、その９月のことだったかしらねえ。

（2005. 8. 26撮影）

校長先生のこと

――在学中の校長先生はどなたでしたか？――

ミス・クレイグでした。あのころは東洋英和女学院といわないで東洋英和女学校だったんです。ですから、校長先生、校長先生っていいましたわね。いい校長先生で、おきれいな方でしたよ。わー、いい先生だなって思ってたら、あとでお名前がついた講堂が建つくらいだから、来ていらした先生の中では指折りの方だったんだなって思いました。その副校長ってのがミス・ブラックモア。大きな方でしてね、お笑いになるとすごいかわいいお顔なんですけど、叱られるとすごいこわい顔なんですの。

ミス・クレイグはイギリス人らしいイギリス人(注)でしたね、きりっとした。朝なんかはずっと見てまわりになりまして、ガラス窓がいい加

ミス・グレイク

減にあけてあると、NO！なんておっしゃって。ピシッとそろわなきゃいけない、同じぐらいの高さにするようにって、それをずうっと見てまわってらした。ミス・ブラックモアみたいにガミガミお叱りにならないで、身をもって示すというようなところがおありになって、みんなに評判よかったですよ。寄宿生の方はやっぱり先生と接触があって親しいですから、クレイグ先生はいいわーって、あの先生の悪口言う人はいませんでしたね。ミス・ブラックモアには叱られた方多いもんで恨み重なり…〔笑〕。ミス・ブラックモアはもうおやかましくて、よく廊下なんかちょっと遅くなったからって駆けたりするとNO！NO！NO！NO！Do it right！なんて。当時は、ブラックモア先生なんてみんな言わないで、ブーちゃま、ブーちゃまって。副校長のミス・ブラックモアが怒り役で校長先生のミス・クレイグがなだめ役みたいな感じでしたねえ。そして私ども卒業してからですけど、ミス・ハミルトンが校長先生におなりになりました。あの方は音楽の先生でしたのよ。今はもうずっと校長先生も日本人でいらっしゃいますでしょう。私どものころはみんな外国の方でらしたわ。

加茂令先生のこと

いろいろな先生がありましたね。加茂先生っていう、太ったおばあちゃまがいらして、黒紋付か何かをお召しになってらした。ブラックモア先生は、さーっとお背が高いですからお太りになってらしてもいい格好なんですけれど、加茂先生は、本当に…お洋服を召したらもう〔笑〕…。あの先生もなかなかおやかましいんですよ。

寄宿舎にいらした先生方（1925. 1. 21、ミス・ブラックモアの帰国に際して撮影）
右端：ミス・ブラックモア　　右から３番目：加茂　令先生

お裁縫とそれからお行儀の先生。加茂先生に何か言うときには、よく言葉を考えて言わないと。指摘されるからと思って、ずいぶん丁寧に言ってるつもりでしたけど…。バケツか何かを借りる時に、「あすこにございますバケツを拝借して」って言えば良かったんでしょうかね、「貸していただいても」、いや、「使ってもよろしゅうございますか」なんかそんなふうに言ったんです。そしたら、「まあそういうおっしゃり方はないでしょ」なんて。「あのバケツを拝借させていただいてもよろしゅうございましょうか」と言わなきゃいけない。用事がある時はだれが話しに行くかで大変ですのよ。「ちょっとあなた行ってきて」って…、たいてい無事に帰ってくる人いませんものね。「あら、あれでいいと思ったのに、まだまだそれじゃダメ」って。でも、ずいぶんためになりましたけど。あの時はまあ本当に憎らしい、人のあら探しばっかりしてらっしゃると思いましたけど。やっぱりありがたかったですわ。

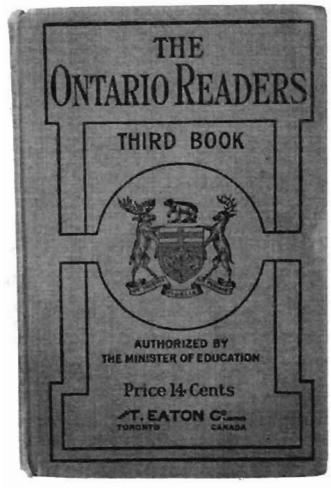
――お授業の様子はいかかでしたか？午前が日本学で午後が英学とうかがっているのですけれど。――

ええ、そうです。午後は英語。まずグラマーがあって…日本の方ですとよく通訳をなさってらした大貫先生とか。それから、聖書読むのがありましたわね。一節ずつみんなずーっと順番に読ませられるんですよ。そうするとね、数えて…ああ、ここ私やるんだわって…その時までは『岩窟王』なんかを…〔笑〕。

あのころは成績順に並んだんですよ。もう驚きましたよ。勉強せずにいられません。一番前になっちゃいますもんね。それでもずいぶん…私どものんきでしたねえ。上から下がってらしたのよって方が沢山おりましたよ。もとはね3級上だったって…、あの方は1年上だった…とか言ったりして。そういう方が前でしょう。恥ずかしいですから、出来ない頭をはたいて勉強せずにはいられませんわね。

英語の授業のこと

それと、あたくしみたいに途中から入った者は、英語で本当に苦労しました。県立でそれまで薄いリーダーで習ってたのが、英和へ行ったら分厚いリーダーで細かい字！まあ大変だこれは!!って。教科書はオンタリオとかなんとかいいましたかしらねえ…。あれ2学期でしたから9月の初めでしょ。前の学校ではThis is a pen. そんなのやってたところにもってきて、英和に行きましたら詩の朗読でOnce in Royal David's city…何のことだか全然わからない。クリスマスの時にダビデの村でキリストがお生まれになったっていう、その詩の暗誦して…まあ大変だと思いました。そうしましたら、やはりお出来にならない方もいらっしゃるんですね。英語と和学のほうとは別々になってまして、片っぽは2年生になっても、片っぽは1年生って具合に。私なんかも英語は1年下へ入りまして、それでもずいぶん勉強しなくては追っついていきませんでしたからね。それで、みんな良くおできになるのねって聞いたら、「だってみんな小学科のころからだから」って。あらまあ、それはいいですわねって言ったんですけれど。それはもういろいろな詩を暗誦しました…もう全然英語覚えてませんけれど。英語ってものは、しょっちゅう使ってなきゃだめですね。もう卒業しちゃっ



参考：英語の教科書
（1927年、英学4年生が使用していたもの）

てから全然外国人と接する機会もなくて…。あのころは、しゃべるのには英語でしゃべらなきゃ返事しません、なんて先生にいわれるような感じでしたから。スペルまで考えて話しましたよ。いまの英語だと…米語ですわね…、簡単な返事をするけど、ちゃんと教科書どおりにやらなきゃいけませんから。一生懸命でしたよ。グラマーだって考えなけりゃいけませんでしょ、大変ですよ。英語は本当に私どもが入ったころからたいしたもんでしたよ。村岡花子さんっていってね、あの方なんかが健在で、そのころはばりばり通訳など。その他に、誰だったかしら、もっと昔にあそこを卒業してらっしゃった方が英語で話をなさってました。あらまあ明治の頃に、私が生れた頃に入ってらした方で、そんなしょっちゅう英語で話ができるような方がいらっしゃったなんて、たいしたもんだなって思ってました。それはそうでしょ。昔のほうが外国の方が多かったです。いまは日本人の先生ばかりでしょ、校長先生だって日本人なんですものね。あれは戦後そうなったんですかねえ。一時ほら、英和の英はねえ…永久の永を書かなくちゃならなくて…あれ、くだらないって思ってましたけど。

印象に残る授業と先生

午前中は日本人の先生ばかりでした。みんな女の先生ばかりでしょ。理科の先生とお習字の先生は男の先生。いま思いますと、英和はたいしたもんでしたのよ。岡麓って方〔岡三郎先生〕ですけど有名な書家なんですのよね。私ども男の先生だと、なんかもう馬鹿にしちゃって。また優しい先生がいらっしゃるんですよ。だからなおさら調子にのって。理科の先生なんてもう、いいかげんわがままいっちゃって…。わがままっていったって、かわいらしいもんですよ。たいしたことないんですのよ。先生それはいやですとかなんとか、そんなようなことで困らせたり。

数学は、日本人の方なんですけれど、岡本先生って確かいったと思います。女の小柄な先生で、いい先生だったの。まあ、しょっちゅうお腹が大きくて…そればっかり印象にありますよ。まあ、また先生おなか大きい。だから次々とお子さんがおありになったんですね。でも、なかなかいい先生でらしてね。先生のお話が、とても面白いんですのよ。ですから、「先生、一生懸命早くお勉強致しますから、お時間をあけてあとお話をうかがいたい」ってお願いしたりしましたの。〔終戦直前の教職員写真に岡本先生のお姿をみつけて〕まあ、懐かしいこと。いまでもご健在かしら？もう、私どもの先生は…ご健在

教職員（1945年７月24日撮影）　前列左から３人目：岡本あき先生

じゃないでしょうね。だって私が100歳すぎているんですから。その先生ですからね。いくらなんでも〔笑〕。

西洋料理のお時間もありましたけど、だいたい、お菓子作りが多かったみたい。そんなお料理なんてものはあんまり作らなかったですよ。クッキーみたいなものとか、マシュマロみたいとか、そんなようなもの。簡単なものでしたよ。それから、大江スミさん…お料理では有名な先生…に、日本料理を習いました。のちに一ツ橋に学校をおつくりになった方。だから結局、英和はいい先生がきてましたね。

あと印象に残っているのは歴史の先生。女の先生で、お名前忘れてしまったのですけど、大柄な方でしたよ。その先生は、もうぺらぺらぺらぺらぺらぺらぺらこうおしゃべりになる。普通は要点をとってまあノートするんですけど、先生のおっしゃる通りを書かなきゃ大変なんですよ。試験がありますでしょ…お風呂の中で殺されたとかなんとか、聞いたその通りに書いてあるのは成績がいいんですよ。だから一生懸命ですよ。もう何も他のことは考えず、ノートを広げてぱたぱたぱた…鉛筆をたくさん削っておきましてね。もう先生のおっしゃるのをノートに。ですから、復習するんでもその通りにやらなきゃ。抜けたりするもんだからちょっとノート貸してなんて、みんなお互い、大騒ぎしまして。試験の時そう書かなきゃならないから。それが抜けたりなんかしたらダメ。まあ、あれは本当に筆記するのがもう苦労でしたわ。

体操のことは…私、あんまり印象に残ってないんです。和服でしたからねえ、普段。だから普通の袴でしょ。それを、男袴みたいなふうに割れるように家で作ってもらって、スナップでとめてズボンみたいな形にして…そんなふうにして体操の時はしましたよ。別に変わったことはしなかったと思いますけれど。運動はあんまりさかんでなかったですわ。運動場が狭いせいですかしらね。

授業が終わってから、あとはピアノのレッスン。あの頃、いいのじゃないですけどピアノがずいぶんありましたから…みんながレッスンに使うには。それでレッスンのあとは、さっさっさと帰ってきちゃう…どこへも寄らずに、明るいうちに。日が暮れないうちに帰ってらっしゃいってやかましくいわれて。もうまじめ一方ですね。すーっと学校へいってすーっと家へ帰りました。

幻の修学旅行／クラスの雰囲気／寄宿舎生のこと

――坂様の学年の方のエッセー*を読みましたら、修学旅行をボイコットした学年と書かれていたのですけれど…どのようなご事情だったのですか？（*「つっぱりクラスのはしり」『東光』東洋英和女学院創立百周年記念号所収）――

そうなんですの。あれね何か寄宿の方と先生とが、ほんのちょっとしたことでぶつかって…寄宿の人が、いつもいつも同じ所ばっかりって言ったかしら…何かそんなようなこと…それでは私たちはもう修学旅行にはまいりませんって言っちゃったんです。寄宿舎生はずいぶん多いですから、私どもみたいな通学生も、それに同情しないわけにはいかないんです。じゃ私たちは行きますとは、そういうことは言えませんでしたわね。で、ずるずるずると、行かないことに。だから、あとから、ずいぶんソンしちゃったわって。せっかくあのころ日光でしたから、一生懸命行って楽しもうと思ってたのに。とうとう修学旅行はなし。当時修学旅行へ行かなかったのは私どものクラスだけでしょう。ずいぶんいやなクラスだったのね〔笑〕。毎年日光に行くの決まってるみたいでしたね。泊まるホテルも決まってるんですのよ。とにかく、やかましかったですよ、あたしどものころはいろいろと。というのも遠足なんて遠くへなんかちっとも行かないんですの。行けば植物園ぐらいですの。また植物園？なんていって。行けば楽しいんですけれど。何か変わったところへ行きたくて。よその学校じゃ遠くへ行くらしい。「卒業の時に日光に行かれるからいいけど、でも、それだけでしょ」なんて言って、みんな。よそでは、いなかから東京へ出てくるとかいろんな修学旅行があったのに、やかましかった…。あれはイギリス式なんです。やっぱり家庭教育、やっぱり女の子のしつけというのは厳しいんですわね。だから本当の英国式ですよね。いま何とかいっ

たってアメリカ式ですもの。あんな道あるきながら何か食べるとか、そういうことはイギリス人は決してありませんから。だからいい教育でしたわ。日本にちょっと似ているような。

そうそう、それから卒業式もきらびやかなのをやめて全員が黒紋付に袴に。あれは私どものクラスが初めてですよ。それまでは、みんなお振袖か何かでしたの。お振袖なんて、ある人はいいけど、ない人たちはかわいそうだから、もう私たちから質素にすることに決めましょって言ってそうしました。

いまでもそうでしょうか、他の学校もそうだってちょっと聞きましたけど、学年がひとつおきに仲がいいですのよね。だから一年おきですから、私どものクラスがそんなクラス…あばれんぼう組で、その次のクラスはまたおとなしいクラス、その下はまた…〔笑〕。次の人とかひとつ上とかってのはそうあんまり。ひとつ離れた人と親しいんですの。クラス25名ぐらいでしたね。学年で1クラス。私どもの次の次のクラスからちょっと増えて2組になって、それから3組になってましたかね。急に増えたんですよね。私どものころは、いくらかは通学生が多いっていうとこですわ。あの頃は外交官のお嬢様が多かったんです。ですからご両親が外国に行ってらっしゃるもんで、そういう方が寄宿へ入ってらっしゃいましたよ。寄宿舎生が面白かったですよ。はっきりとは覚えていないのですけれども、まあ、先生とけんかして。けんかできるほど親しかったのでしょうね。

お客さまがいらっしゃるのよっていいますと、必ず鳥の丸蒸し。あの内臓をとりだして、それからいろんなお野菜類やらいろんなものをまたそのおなかへ詰めてそして蒸し焼きなんですよね。まるごとぽんとだすお料理…普通でもありますでしょうけども、それがお得意。お得意か簡単だからなんですか、いつもお客様だとそれなんですよ。あ、今日はまたお客様らしいっていうと、女中さんたちが、鳥の羽むしってらした。だいだいトロントから来ていらっしゃる方が多かったでしたわね。監督官みたいな方が時々様子をみにいらしたんじゃないですかしらね。

――実は100歳を超えてお元気でいらっしゃる方がいますよと同窓会の方から坂様のことをご紹介いただいて、本日お邪魔させていただく機会を得たのですが…湘南支部の会は毎年あるのですか？――

年に1回あるの。いつも何か都合の悪い時で失礼しちゃうこともありますが、去年の時はちょうど体があいていたものですから、行ったんですけど。恥ずかしいみたいです…〔笑〕大正卒なんてのは誰もいない。みーんな昭和昭和で私一人が大正で。102歳なんて言ったら、わあーってみんな珍しがっちゃって…〔笑〕。お嬢様をご卒業させなさった方は、学校にもよくいらっしゃいますけれど、そうでないと、やっぱりちょっと足が遠くなちゃって…。英和は戦前と戦後で変わったなあって事ありますかしらねえ。

鳥居坂界隈と校舎の様子／礼拝のこと

私の頃には、英和のお向かいは三条さんの、その隣は李王殿下のお屋敷でした。鳥居坂にはガス燈があって、夕方なると灯をつけにきました。そのことが何かの本に出てまして、ああやっぱりあれはあの頃でも珍しかったんだわと思ったことがありますよね。私…あたり前にこんなもんだなんて子供の頃には思ってましたけれど。そういえば、鳥居坂…あの通りに桜もありました。あれもいつのまにかありませんねえ。ずーと桜並木でね。花なんかが散ってくる時にはいーい気持ちでしたよ。ですから、いま考えたら、ずいぶんあの通りはロマンチックだったんだなあって。その時は何にも珍しいとも思わなくて、こんなもんだなあって思ってましたけれど。

学校のお庭にはリラの花もありましたのよ。あたくしあの頃それが珍しかったものでね。自分のところにはライラックなんて花なかったものですから、ああ、珍しいななんて。…門から入って下がったところにそのライラックがありましたよ。大きな株でねえ、花が咲くと素敵でした。校舎〔の写真を見ながら〕…通っているころには別に素敵だとは思わなかったけど、あとから考えるとなんかとても素敵で素晴らしい。イギリスの学校って分かりますものね。ほんと

東洋英和女学校校舎

懐かしいですよねえ。幼稚園もありましたの。入り口は違ってまして、私なんて幼稚園の入り口から入る方が下駄箱が近かったもんで、よくそっちから入ってましたよ〔笑〕。イギリスの建物ですわね。…幼稚園は、おもてからは陰になっている方にありました。教会〔麻布教会〕もそっちのほうにありました。

土曜がお休みのかわりに日曜は必ず、教会へ行かなきゃいけないんですの。それから、毎日だったような気がしますけど、始まる前に講堂に行きまして、礼拝をしました…短い時間でしたけど。だから、私何かに書きましたけれど、教育ってのは大事なことだなあとつくづく思います。私は途中から入ってたんで、しかも、…あの叔父も頑固な叔父でしたし、耶蘇教、耶蘇教なんていったころですからね…クリスチャンでないですけれども、やっぱりああして日曜の度に教会にいって牧師さんのお話をうかがったりなんかしていると、自然に…それから学校の空気もそうですから、自然にそれが身に入ってくるんです。特別勉強しなくてもね。ですから、精神がやっぱりキリストの精神です、あたくしはいまだに。ことに民生委員なんかしますと、やっぱり人のために尽くすというなことも…。やはりそういう精神があると、やっぱり考え方も違ってきます。自分はさておき先ず人のためにというのが自然に身につきまして、ああ教育ってものは大事なもんだなと思いますよ…何も牧師さんの話を熱心に聴いてたわけでも何でもないんですけど〔笑〕…本当に。

(注) ミス・クレイグはカナダのモントリオール出身。坂様の在学当時のカナダは、1931年に実質上独立する以前のイギリスの自治領カナダ連邦であった。

台風一過の8月26日、史料室の谷川と保坂の2人で鎌倉にある坂文子様のご自宅をお訪ねしました。今回の訪問に際し、同窓会湘南支部および同窓会の方々に大変お世話になりました。

坂様はとても102歳とは思えないお元気なご様子で、そのお話は女学校当時の臨場感にあふれ、笑いのたえないひと時を過ごすことができました。心地よい風と蝉の声を背景に2時間に及ぶインタビューとなりましたが、紙面の都合上内容をすべてお伝えできなかったことが残念です。

（文責　保坂綾子　　法人事務局史料室）

〈思い出の先生がた〉10

光明先生の思い出

遠藤順子

三・四日前に突然英和の二年先輩とおっしゃる方から電話が掛かってきました。お会いしてみれば或はお顔見知りの方かも知れませんが、お名前だけでは何のご用か見当も付きませんでした。「英和では過去、英和に奉職された先生方の足跡を残して置くためにその先生方のご友人やご薫陶を受けた生徒達に思い出等を書いて頂いています。今回は光明先生の特集を出すことになりました。貴方は光明先生受け持ちのクラスだったとのことなので何か思い出を書いてほしい」というお話しでした。過去茫々と言う言葉がありますが何と言っても今から六十四・五年も昔の話です。強烈な印象をうけて記憶に残っていることもあれば、全然覚えていないことも沢山あります。不安になって在学当時から私淑し、今もお親しくお付き合いをしているSさんに助太刀を頂きました。

私どもが英和の小学科から女学科に上がったのは昭和十六年、つまり日米開戦の年の春でした。混乱もあったのでしょう。当時一年は二組制でしたが、倉長先生と鶴来先生がそれぞれ受け持たれ、二年になってから光明先生と水野先生に変わったようです。たしか途中で御二人の先生の間で再度受け持ちを交換なさったように覚えています。父は元々若いうちに英語を身に付けさせようと思って英和を選んだと思いますが、すでに開戦は必至の状況となり宣教師の先生方は次々と帰国されました。入学の折に英語の讃美歌を頂きましたが毎週金曜日にあった英語の礼拝も間もなく廃止となり、戦争がはげしくなるにつれ、英語のみならず一般の授業も縮小され工場へ駆り出される日も多くなりました。

たまに学校へ行ける日にも空襲で市電が止まったり国電が止まったりと通学は次第に困難となりました。暗い時代でしたが光明先生は常に溌剌としておられ、困難が多い環境のなかで向上心を失わないでいる生徒達を心から愛し常に励まして下さいました。殊に限られた英語の授業の折には出来る限りのことを伝えようとなさる先生のお心が、クラス全体に伝わって一期一会といった雰囲気もありました。ご恩は忘れられません。「女学校の免状より若い今のうちに本当にしたい勉強をしておきなさい」と言う父の勧めによって私は女学科四年（昭和十九年）の秋英和を中途退学しました。父は自分の存念を直接学校に出向いて申し述べたようでした。その後私は皆様とお別れがしたくてお昼の時間に学校へ伺いました。皆様に「どうしてやめるの？」と聞かれて返事に困っている私に光明先生は只一言「お父さまに感謝なさいよ」と仰って下さいました。先生は何もかもお判りの上でしっかり勉強しなさいと激励してくださったのだと感銘を受け今も忘れえぬ一言です。

（1944年高等女学科中途退学）

光明照子先生略歴

1911年	6月20日生まれ
1928年	東洋英和女学校高等女学科卒業
1932年	東京女子大学英語専攻部卒業 東洋英和女学校に勤務（～'46.4）
1937年	マウント・アリソン大学卒業
1946年	旧制東京女子大学教授就任
1949年	コロンビア大学ティーチャーズカレッジ修士課程修了（教育行政学専攻）
1950年	新制東京女子大学文学部助教授就任（'52年から教授）
1954年	東洋英和女学院短期大学非常勤講師兼任（～'55.3）
1966年	東京女子大学短期大学部学部長
1976年	東洋英和女学院院長就任（～'~~80~~.3） '85
1977年	東洋英和女学院短期大学学長（～'79.12）・高等部部長（～'81.3）兼任
1990年	9月10日逝去
〈その他〉	日本YWCA中央委員、会長、世界YWCA常任委員などを歴任

〈資料紹介〉 8　年史（2）

『東洋英和女学院七十年誌』

島　　創　平

はじめに

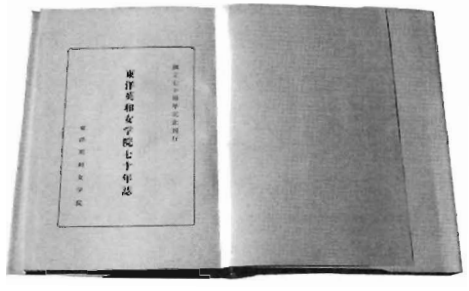
『東洋英和女学院七十年誌』は昭和29年（1954年）に発行された。その第1ページには、著名な歌人で本学院の卒業生でもある宮崎白蓮が、母校創立七十年を祝って詠んだ短歌六首が載せられているが、その中に「我国の栄枯盛衰ともに来し七十年はおろそかならず」という歌がある。昭和9年（1934年）には英和の歴史の大きな節目となる五十周年の記念式典が大々的に挙行され、380ページにも及ぶ『五十年史』も発行された（『五十年史』については、前回の「資料紹介」で取り上げた）。しかし創立六十周年に当たる昭和19年（1944年）は、太平洋戦争の最中のことであり、この年の11月6日には「警戒警報の中を上級生のみ僅かに集り、心ばかりの記念式を行った（『七十年誌』48ページ）」だけであった。それだけに、戦時中の苦難を経て再び平和の時代となり、無事に七十周年を迎えることができた喜びと感謝の想いが、この歌に籠められているように思われる。そしてこのような想いが、この『七十年誌』の随所に見られるように感じられる。

『七十年誌』を読んでまず感じるのは、『五十年史』と比べて現代の東洋英和とのつながりが、より直接的になったように思われることである。『五十年史』の時代は戦前のことでもあり、何よりも歴代の校長がカナダ人の婦人宣教師で占められていたから、未だ明治時代の開校以来の伝統と直結しているように感じられる。しかし戦争という試練を経て、戦後の英和は学院のあり方や制度など様々な点で大きな変化を遂げ、現在に至っているように思われる。その意味で、英和創立五十周年から太平洋戦争の終結に至るまでの昭和10年代は、英和の歴史における大きな節目であったと言えよう。

太平洋戦争前後の英和

『七十年誌』では、七十年に及ぶ英和の歴史を振り返るに当たり、英和の歩みを六つの時期に分けている。このうち昭和9年（1934年）から昭和20年（1945年）にかけての時期は「苦難の頃」というタイトルが付けられ、最初に「我らの顧みる所は見ゆる者にあらで見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時にして、見えぬ者は永遠に至るなり」というコリント後書4章18節が引用されている。昭和9年に創立五十周年を迎えた英和は、当時の日本における軍国主義とファシズムの台頭を背景に、様々な試練に直面することになる。冒頭に挙げられた聖句は、このような危機にあって、なおも希望を失わず、キリスト教の精神に裏打ちされた英和の伝統を守り抜いた、当時の英和関係者の気概を表しているように思われる。

昭和10年には「御真影」を奉安していないこ



とや小学科の土曜休日が文部省から問題とされ、その後「御真影」は昭和14年に奉安されることになる。昭和11年には二・二六事件が起こり、英和の支持者でもあった齋藤実内大臣（「敬神奉仕」を揮毫）と高橋是清大蔵大臣が暗殺された。昭和13年ハミルトン校長は帰国し、小野校長が就任する。これ以後カナダ人に代わって日本人が校長を務めることになる。昭和15年には、校名を「東洋永和女学校」と改名せざるを得なくなる。こうした様々な外圧の高まりの中で、創立以来のキリスト教に基づく教育方針はなお堅持され、太平洋戦争開戦後も、昭和18年までは毎朝の礼拝やクリスマスの行事が行われた。また英語教育も続けられた。昭和16年12月太平洋戦争が勃発、翌年カナダ人教師はほとんど全員が帰国し、戦時体制は一層強化され、昭和18年には中等学校令により宗教教育の継続は不可能となった。昭和19年には幼稚園は指令により閉鎖、初等学校は栃木県に疎開した。以後戦争の激化と共に犠牲者も増えていったが、校舎の焼失は免れ、ようやく昭和20年８月の終戦を迎えるのである。

『七十年誌』は、英和をめぐるこうした出来事を淡々と述べているが、その裏にはいろいろな困難が伴ったことが推察される。例えば小学部に関して、昭和16年の総力戦体制化の中で、「小学校」は「国民学校」に切り替えられたが、「然るに私立小学校は栄誉？ある『国民学校』を呼称することを禁ぜられて、張出しのかたちで『初等学校』を頂戴したのである」と述べられている（106ページ）。さらにこの個所では引き続き、「都内の私立小学校ではその後も引続き初等学校を名乗っているところもあるが、何か国家の圧力に対する抵抗を物語っているものの如くでもある」とも述べられている。また先述したように、昭和18年から宗教教育ができなくなったが、これに関して「要は教師の伝道精神の問題で、華々しい行事など行わなくても、その精神のある限りさして影響のないことであった」と、さりげなく書かれている（47ページ）。それだけに、昭和20年、最後まで学校を死守すると決意した20名の教職員が、７月24日正面玄関で記念撮影をしたことが述べられた後、一行置いてただ一言「ついに敗戦の日が来た」と書かれているが、この一言に、戦争という試練をようやく乗り越えることができた、当時の教職員の感慨を読み取ることができるように思われる。

戦後の英和

戦争という大きな試練を乗り越えた英和は、新しい学制改革の下、校名を「東洋英和」に戻し、キリスト教に基づく教育方針という建学の精神を明文化し、幼稚園も再開されるなど、復興の道を着実に歩みだした。カナダ・ミッションとの関係も回復し、G. E. バットが理事に推薦され、バットの後はストーンが理事に就任した（ストーン牧師は、昭和29年の台風により転覆した洞爺丸遭難事故に巻き込まれ、殉死した。彼の感動的な最期の有様は、三浦綾子の『氷点』の中で描かれている）。校地も拡大し、特に昭和25年には短期大学が開設されることになり、まず保育科が、そして開学七十周年に当たる昭和29年には英文科が発足した。

このように、戦後の英和は開学以来の伝統を見事に復興し、次の世代に着実に伝えることに成功した。最近戦後体制の「見直し」や教育の危機が叫ばれ、また近い将来就学人員が減少に転じるという見通しがなされる中、この伝統をこれからどのように保持し、さらにどのように発展させていくかという問題は、現在の我々に負わされた課題であろう。

『七十年誌』にはこの他、創立五十周年にあわせて作られた東洋英和女学院校歌に関するエピソードや、英和の第一期生である岡部（旧姓高井）正子氏（当時87歳）のメッセージなど、興味深い内容が含まれている。英和の奥深い歴史の一端に触れた思いがした。

（大学教授・史料室委員）

史料室よりのお知らせ

資料紹介でとりあげました『東洋英和女学院七十年誌』にはまだ残部がございます。ご興味のある方は、差し上げることができます。

詳細は下記までお問合せ下さい。

106-8507　東京都港区六本木5-14-40
TEL　03-3583-3325(代)
Fax　03-3583-3329(直)
E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp
法人事務局史料室

＊ 小学部関係写真とネガ〔行事、新旧校舎の様子〕
＊ 中高部旧校舎の写真
＊ 短大校舎取り壊しの際の写真・中高部新校舎の写真とネガ
＊『児童の権利に関する条約の基本理念と現場への適用』（興望館資料シリーズ22）
＊『句集　百日草』〈精選作家双書Ⅸ〉（加藤裕子著）
＊『かたばみの花として―思い出の記―』（江藤ゆき著）
＊『倭文はた　愛と奉仕の日々』（松縄善三郎著）
＊『死生学年報』（東洋英和女学院大学死生学研究所編）
＊『行人坂教会百年史』
＊『明日にむかってねる』〔賀原夏子関係〕
＊ 講談社版『アンの青春』・『アンの友だち』・『アンをめぐる人々』
＊『世論時報』第38巻第1号～7号〔村岡花子関係記事掲載〕
＊「赤い靴はいてた女の子再考」（『尚誌』掲載斉藤邦彦）
＊「第５回はぐぐみセミナー」収録カセットテープ
＊『大学アーカイブズ』No.32／『年史編纂の現状と展望―2003年度全国研究会の記録－』／『全国大学史資料協議会西日本部会会報』No.17
＊『専修大学125年』
＊『同志社談叢』第25号
＊『一九四三晩秋―最後の早慶戦』
＊『立命館百年史紀要』第13号
＊『京都大学大学文書館研究紀要』第３号／『大学所蔵の歴史的資料の蓄積・保存ならびに公開に関する研究』
＊『関西学院史紀要』第11号
＊『樟』（活水・教育研究紀要）第17号／『活水学院創立125周年記念写真集』
＊『成蹊学園資料館　資料集①　東京都公文書館所蔵資料』／『成蹊学園史料館年報』2004年度
＊『駒澤大学百二十年』／『駒大史ブックレット』１～４／「岡本かの子と駒澤大学」
＊『神奈川大学史資料集』第二十一集
＊『大学史紀要』第９号／『大学史資料センター事務室報告』第26集（明治大学史資料センター）
＊『南山学園資料集　名古屋外国語専門学校資料集』
＊『写真が語る日本女子大学の100年　そして21世紀をひらく』／『日本女子大学史資料集』第９　日本女子大学学校通信教育関係資料
＊『福澤諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係』／『学問のすゝめ・文明論之概略・福翁自傳総文節索引』
＊『拓殖大学百年史研究』16号
＊『創価教育研究』第４号
＊『広島大学文書館紀要』第７号
＊『関東学院ニューズ・レター』第１～６号
＊『国際環境の中のミッションスクールと戦争－立教大学と事例―』
＊『愛と至誠に生きる　女医吉岡彌生の手紙』（東京女子医科大学）
＊『あゆみ』第55号（フェリス女学院資料室）
＊『東京経済大学の100年』
＊『日本大学の国際教学戦略―平成の歩み―』／『黌誌』創刊号（日本大学資料館設置準備室）
＊ 宮城学院資料室年報『信・望・愛』2004年度

主な購入図書

＊『ヴォーリズの「祈りのかたち」展』改定版
＊『アメリカ婦人宣教師来日の背景とその影響』
＊『青山学院のメソジズムと学風』
＊『新修港区史』
＊『近代文化の原点－築地居留地』vol.1～3
＊『日本キリスト教歴史大事典』
〔片山廣子関係〕
＊『翡翠』／『物語の娘　宗瑛を探して』
〔村岡花子関係〕
＊『若き日の夢』／『王女物語』／『炉ばたのこおろぎ』／『（全訳）栗毛のパレアナ』／『たんぽぽの目』
〔長岡輝子関係〕
＊『長岡輝子の四姉妹－美しい年の重ね方』